

第一一話 『未知の星を求めて』 エピソード 三

新聞連載の「星空への招待」が初めて本になった一九六六年四月、千鳥が淵のヘヤモンドホテルで記念会が催されました。この日は同じコメットハンターの池谷薫さんを招待し、東京天文台から台長の廣瀬秀雄博士や下保茂氏、五藤光学の五藤斉三氏。それに村山定男氏や天文ガイド誌編集の田村栄氏もお招きしました。一方高知県では六月に高知大学の先生がたを中心に、県内の文学関係の人たちが集まってささやかな記念会が催され、連載を企画したH記者や作家のSさんに、友人の池幸一氏も参加して下さいました。

中には変わった人も居られ、一般から参加した土佐山田町の森本夫人は、大昔お父様が肉眼彗星を発見された意外な話を披露されたのですが、それは年代から推測して井上四郎氏が独立発見した「ボレリー彗星」ではなかったかと思われましたが判然としません。

また自分で新聞を発行しているというOさんは自己紹介の時「私は関さんにお会いするたび敬礼をする」といって人

を笑わせましたが。そう言えば彗星を続けて発見した一九六二年頃から、道で会った人に必ず立ち止まって拳手の敬礼をする人がいて、長く疑問に思っていたのですが、この会でその疑問が解けたわけです。氏は私に尊敬の念をこめて「ハッ」という掛け声と共に不動の姿勢から敬礼をされていたわけです。○さんは暫く自分で発行する「県民新聞」を送って下さっていましたが、最近はずっぱり来なく、消息が途絶えてしまいました。

なおこの記念会で余技として ・ガリレイ作曲のリユート曲、「シシリアーナ」をギターで演奏しましたが、実は作曲者のヴィンセント・ガリレイはあの有名なガリレオ・ガリレイの父で彼は有名なリユート（ギターの前身）の奏者だったのです。

一九五九年、大セゴヴィアが日本に来て大阪中ノ島のフェスティバルホールで演奏会を開いた時、ガリレイの曲が始めて日本で紹介されました。「リユートのための六つの小品」で、その時三〇〇〇人の大聴衆の中にまだ彗星発見前で人生に敗れ苦闘していた二八歳の私が居ました。